

特集●日本近現代の作家と西洋

宮沢賢治の天国／天界と修羅界

富山 英俊

一、はじめに

宮沢賢治は、日本近代の作家、詩人にして童話作家として当然至極に西洋の文化のさまざまな局面と関係をもち、影響されたが、キリスト教との関係でも注目されてきた。つまり賢治は、とくに法華経と日蓮主義とを奉じた仏教徒であったが、たとえば代表作の「銀河鉄道の夜」では、その列車が旅する道筋に、夜空の星座から発想された壮麗な十字架や、キリスト教徒らしい人物や、キリストらしき存在が現れる天上の情景などが描かれる。これらを、一部の研究者はキリスト教からの一方向の影響として理解するが、実際の作品の描写は、多くの微妙なまた意外な細部を含み、単線的な意味づけに適うものではない。また賢治は、本論の表題にいう天界や修羅界といった仏教的世

界観に属する観念をもっていたが、それらの内容や、キリスト教的「天国」などの異同は、作品理解に参照することができ

る。
賢治の詩集『春と修羅』の表題に含まれる「修羅」は、現代日本語から消えていないが（「修羅場」は使われる）、それが何であるか一般には必ずしも正確に理解されていないだろう。「修羅」「阿修羅」は、元はインドの神の一族だが、仏教の考える六つの生存の種類（領域）、「六道の一」としては人間以下の存在」であり「絶えず闘争を好み、地下や海底にすむ」（『広辞苑』）とされる。賢治にとってそれは、自己の把握に関わる重要な観念であり、仏界・天界などと関連しつつその宗教思想の根幹に属していた。——筆者はそれらの主題について研究書『挽歌と反語——宮沢賢治の詩と宗教』（せりか書房、二〇一九年）に纏

めたところだが、ここでは、「銀河鉄道の夜」でのキリスト教的「天国」について、また二つの「神の国」の像（内村鑑三と成瀬仁蔵に由来する）が現れる詩作品について、拙論の概要を再説する。（「銀河鉄道の夜」に関しては、著書で扱わなかった若干の箇所にも触れる）。さらに賢治の多彩な作品群のなかには、キリスト教的な天上と仏教的な天界（さらに修羅界）との関係に言及する詩があるが、その口語詩「あかるいひるま」の内容に触れる（拙著では論じなかった）。

ここで賢治の人生を概観するなら、

一八九六年 岩手県花巻に生まれる

一九〇九—一四年 盛岡中学

一五—二〇年 盛岡高等農林学校

二一年 上京、田中智学の国柱会の活動に参加、妹トシの病状

悪化を機に帰郷

二一—二六年 稗貫農学校、花巻農学校教師

二四年 詩集『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』刊行

二六—二八年 羅須地人協会の活動

二八—三〇年 病氣療養

三一年 東北砕石工場技師

三一—三三年 病氣療養、死去

となる。花巻の町内の裕福な、浄土真宗の信仰の篤い商家に生

まれ、父は仏教の素養も深く、当時の革新的な学僧たちを当地の仏教講習会に招いたりしたので、少年時から近代仏教のさまざまな流れに触れて育った。県内の名門の盛岡中学と新設の高等農林で学び、宗教、文学（中学時代の作歌に始まる）、科学の各分野で広い知識、教養を得ていた。が、のちに死に至る結核の兆候はすでに出ていた。高等農林卒業後は一時進路が定まらず、また家の浄土真宗に満足できず法華経信仰さらに日蓮主義に移行したが、家族友人を改宗させる試みに挫折して（その時期の言動には宗教的な排他性が見られる）、田中智学（国粹的・帝国主義的な日蓮主義で知られる）に傾倒し、家出上京してその活動に加わりとうとした（智学の思想と賢治との関係は種々の議論と解釈を呼んできた）。

帰郷後は新設の地元の農学校に職を得て、生徒の自発性を重んじ文芸や歌曲や演劇などで刺激する教師として活躍した。だが、妹トシの夭折にも遭遇した。生徒の出身農村の実情を痛感し、学校を退職し「羅須地人協会」を名のる集会を組織し、農業指導や文化啓発を目指す活動に入る。ただしそれは、父の経済力を前提とする無償の奉仕活動ではあった。肥料設計などに奔走して心身疲弊し病に倒れてからは、土壌改良用の石灰粉末を作る工場の技師兼販売促進係を務めた一時期を除いて、病氣療養と執筆に余生を過ごした。傍目には生き急いだと見えるが、それも病身ゆえの限られた人生という自覚によったのだろう。ともあれ、かれが何よりやり続けたのは書くことだった。生前

出版の本は詩集と童話集と一冊ずつだが、生涯の各時期に書き続け、驚くほどの量の草稿を残した。

二、「銀河鉄道の夜」の「天上」

代表作「銀河鉄道の夜」については、夜空の闇に光る星々といった「幻想的」な情景のイメージが、作品は読んでいない一般の人々にも流通しているだろうが、北十字と南十字での二つの十字架像もその一部となっている。南十字で、主人公ジョバンニとその友カムパネルラは列車から降りないが、車中に乗り合わせた姉弟とその家庭教師青年は下車し、「白いきもの人」が現れる天上へと向かう。こうした点から作品にはキリスト教の影響が強い、とは流布した印象だろうが、すでに述べたように、作品そのものは一義的に説明しがたい多くの微妙な意味の揺れを孕んでいる。(なお、作品は妹トシ死後二年ほどの一九二四年には最初期の形ができていたと目されるが、その後晩年まで改作が続けられた。残された原稿から異なる多い四段階が復元され、草稿の最終形(筑摩書房『新校本全集』十一巻、九六年)とそれ以前の「初期形一」から「三」(十巻、九五年)が別のテキストとして読める(ちくま文庫版『全集7』(八五年)での呼称は「初期形第一次稿」から「第三次稿」)。

物語の大筋を確認するなら、父が不在で放課後に働かなければならないジョバンニは、学校で疎外され、祭りの夜にいじめ

にあい、逃れた丘の上で不思議な光に包まれ気がつくくと銀河鉄道の車中にある。以前は親密だったカムパネルラと車中で再会し(級友を救おうとして水死したと後に判明する)、また死者でなくその鉄道周辺で暮らすらしい「鳥捕り」といった謎の人物たちと出会うが、そのなかにはタイタニック号事件とよく似た水難にあったキリスト教徒姉弟とその家庭教師青年がいる。そして旅路は北十字のあたりから南十字へと、星座の見える銀河を南下するが、そのうちの北十字の描写を、後期形から引こう(以下、作品引用は『新校本全集』本文篇により、巻数と頁数のみ記す)。

俄かに、車のなかで、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたやうな、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ほうつと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な眼もさめるやうな、白い十字架がたつて、それはもう凍った北極の雲で鑄たといったらい、か、すきつとした金いろの円光をいただいて、しづかに永久に立つてゐるのでした。(十一巻二三八―九頁)

この描写はじつに華麗だが、他の乗客たちが「黒いバイブルを胸にあてたり」して祈ることに反応して「思はず二人もまっす

ぐに立ちあがりました。カムパネララの頬は、まるで熟した苹果のあかしのやうにうつくしくかやいて見えました」(同)という情景の「思はず」は、イタリア人の名前をもつ二人はキリスト教徒でないことを示唆する。

そして南十字では、姉弟がそこで降りると言うのをジョバンニが引き留めようとして起こる、何が「ほんたうの神さま」であるかの論争のあと、やはり壮麗な十字架の前で、姉弟と家庭教師青年は下車し、キリストと思しき存在が迎える「天上」に向かう。

そして見てみるとみんなはつ、ましく列を組んであの十字架の前の天の川の川のなぎさにひざまづいておました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきもの人が手をのばしてこつちへ来るのを二人は見ました。(一六六頁)

だが、それに続く場面は、多くの読者の予期と異なる要素を含む。

けれどもそのときはもう硝子の呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ふうちに銀いろの霧が川下の方からすうつと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりました。たゞたくさんくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に

立ち黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいてゐるだけでした。(同)

このように、汽車が動くとき十字架はすぐ霧に隠され見えなくなる。本来のキリスト教の十字架の天上は、全宇宙の中核であるはずで、それが霧ごときに消されるのは、予想や通念に反するだろう。さらに(そうした細部にどう反応するかは読者次第だが)ここで「円光」をまとうのは通例の天使や聖者でなく「電気栗鼠」という、とくに説明のない謎めいた存在である。

そして拙著ですでに述べたが、この天上の神は、ヨーロッパ中世の宗教画が描くような、人間を天国と地獄とに振り分ける怖るべき存在と感ぜられるだろうか。そう感じない読者が多いのでは、と推測される。そうだとすると、その理由は作中で家庭教師青年が、姉弟のもう亡くなっている母は天国で二人を待っている、と語っていたことが影響しているだろう——「それよりも、おっかさんはどんなに永く待つてゐらっしゃったでせう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたつてゐるだらう」「早く行つておっかさんにお目にかゝりませうね」(一五二頁)。このキリスト教徒たちは、神の裁きは人知の予測を超えるかもしれない、とは危惧しない。

ここには、欧米の近代の特定の来世観、神中心というより人間中心的に、「天国」を家族の再会の場所として思い描く心性が介在している(それは近代日本にも伝来した)。その心性の

歴史について、拙著ではフィリップ・アリエスの『死を前にした人間』（みすず書房、九〇年）を参照したが、ここではコリーン・マクダネルとバーンハード・ラングの『天国の歴史』（大修館書店、九三年）を引くなら、この件については「ヴェイクトリア朝の小説家たちは、死後の世界の生き生きとした描写にはスウェーデンボリに多くを負いながらも、その夫婦という基本単位を家族にまで拡張したのである。夫婦愛が重要であるのはそのままであるが、根本的な愛とは家族の中に体験される愛ということになった」（四四七頁）という記述がある。賢治は、キリスト教の歴史の変遷の一面面に応答し作中の一要素として組み入れたのであり、唯一不変のキリスト教思想なるものを「誤解」したわけではない。

三、二つの「神の国」

賢治作品でのキリスト教的な主題は、死後の行き先としての「天国」だけでなく、この地上に出現すべき「神の国」にも関わる。キリスト教の根本思想である「神の国」は、地上の悪の帝国を転覆すべき救世主を待望するユダヤの終末論に由来するが、それと、キリストの「再臨」（刑死後復活し昇天しているがいずれ地上に戻る）との先後も問題とされてきた。その主題については、すでに拙著の第四章に纏めたので（その一部はこの『言語文化』三四号に掲載の論考に基づく）、ここでは手短かに再

確認するとして、一九二四年の七月二五日の日付の詩「北上川は焚気を流しィ」（未刊に終わった「春と修羅 第二集」の時期に属する）では、妹との交流に部分的であれ基づくと想定できる対話のなか、カワセミを「ミチア」と呼び謎かけをする兄と妹との機知にみちたやり取りが、以下のように現れる（以下、詩の引用では改行はスラッシュで示す）。

（何よ ミチアって）／（あいつの名だよ／ミの字はせなかのなめらかさ／チの字はくちのとがった工合／アの字はつまり愛称だな）／（マリアのアも愛称なの？）／（ははは、来たな／聖母はしかくのしりて／クリスマスをは待ちたまふだ）／（クリスマスなら毎日だわ／受難日だって毎日だわ）／（あたらしいキリストは／千人だってきかないから／万人だってきかないから（三卷一〇一頁）

このように妹の声は「千人」「万人」の「あたらしいキリスト」を語るが、これは、妹トシが学んだ日本女子大学の創始者、成瀬仁蔵とその周辺の人々の宗教思想に由来すると想定できる。それは「神の国」を人間に作りうる理想社会として捉える、近代の合理主義に融和的な神学観であり、そこではそれに献身する人々を「キリスト」と呼びうる。それに対し、賢治には「基督再臨」という題の、羅須地人協会の時期の一九二七年四月二十六日の日付の謎めいた詩作品もある（「春と修羅 第三集」の先

行形を多く含むが、それ以外の作品をも含む「詩ノート」所収)。その書きかけのまま残された作品の一部は、畑での作業の際に唐突にイエスの像が出現した様を次のように描く。

また勞れて死ぬる支那の苦力や／働いたために子を生み悩む農婦たち／また、、、の人たちが／みなうつ、とも夢ともわかぬなかに云ふ／おまへらは／わたくしの名を知らぬのか／わたくしはエス／おまへらに／ふた、び／あらはれることをば約したる／神のひとり子エスである(四卷二二六―七頁)

これは、内村鑑三の一九一八年ころの「再臨運動」に由来すると見なせる。それは、近代の合理的常識に抗い、神の現世への直接的介入への信をあらためて主張する思想運動だった。そして内村自身は、当時の神学用語の区別を用いて、自らは「前千年王国論者」(Pre-millennialists)「先ず再臨ありて然る後に神の国の出現ありと信する者」であり、「後千年王国論者」(Post-millennialists)「再臨は神の国の完成の後にありと信する者」ではないと、と述べている(岩波書店『全集』二四卷四九頁)。後者について前掲の『天国の歴史』から該当する記述を引けば、「リベラルなプロテスタントの神学者にとつては、キリスト再臨前の善き一千年という期間は人類の努力を通して生まれるというポスト千年王国的な信仰が、世界は幸運な宿命に向

かって進んでいるという観念に火をつけた恰好になつていった(五一―八頁)。内村は逆に、そうした観点を批判して、神の国は再臨という人知を超えた神的な力によつてのみ成立しうると論じた。

この詩篇の伝える出来事について、賢治はここでこそ真にキリスト教の神に出会つた、と捉える読者もいるだろう。他方、賢治はいかなる宗教的／文学的な文脈において、こうした詩をも書いたのか、と問うこともできる。それは私見では――拙著第七章および論考「心象スケッチ、詩」(温く含んだ南の風が)、文語詩「不軽菩薩」に関する補論」(『宮沢賢治研究 Annual』二九号、一九九一年)で扱つたが――、賢治が六世紀中国の天台智顛の「十界互具」つまり仏・菩薩・縁覚・声聞・天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄という存在の十の領域(六道の拡張)は「それぞれが互いに他の九界をも内に含み持つているということ」(『広辞苑』)や、「一念三千」、「人の平常心(一念)に宇宙存在のすべてのあり方(三千)が含まれるとする教え」(同)の観念に動かされていたことに関係する。

これは奇矯に響くかもしれない。だが、賢治の信じた日蓮による救済宗教の構想はじつは、智顛が瞑想経験から得た「人の世界と仏の世界は互いを含みあう」という理念的直観(「理の一念三千」)を、「南無妙法蓮華経」の唱題などの集団的実践によつて現実性(「事の一念三千」)にもたらしうる、という信条を根拠とした。賢治もそれを了解し信じた、と想定できる――

書簡で友人に推奨した(番号一七八の保阪嘉内宛(十五卷一九七頁)等)田中智学の教学書の内容や、次節でも触れる「思索メモ1」「2」(十三卷(下)二六二―二三頁)などの記載からして、それらの観念は、賢治に、いわゆる幻視や神秘体験を含めて、その心の世界に起こることを何であれ記すことを促した―再臨するキリストのうつつの幻をも含めて。それらは、賢治の詩に記録性、受動性、未決性といった特質を与えた。

なおその天台思想は、平安時代後期の比叡山で「本覚思想」と呼ばれる方向への変容を経ていた。それは、如来の絶対的な悟りと救済の力は現世にすでに顕在的に及ぶと直観し、さらにその力を世界の諸存在の自ずからの展開と同一視する、内在性と自然化に引かれる性向だった。宗教史家たちが教えてくれるところでは、親鸞も日蓮もそこから発しその影響を留めたのであり、それは種々の経路を経て近代へと存続し、賢治にも達したと想定できる。その宗教思想は、ここでは言及に留めるが、たとえばキリスト教との接触の別の一例としても読まれる花鳥童話「めくらぶだうと虹」に現れる(拙著の第五章で扱った)。

四、口語詩「あかるいひるま」のキリスト教徒女性との対話

賢治の口語詩に「あかるいひるま」という作品がある(『新校本全集』では「口語詩のなかで、作品番号および日付けを付されていないが、専用の詩稿用紙「……」に記されている」詩

群を指す「口語詩稿」の一篇として扱われる)。これは、晩年の療養中に、トシ死後まもなくの一九二二年のある出来事、東北本線車中でのアメリカ人宣教女性(盛岡ついで仙台にいたエラ・メイ・ギフォード)との会話を追想している、と理解できる詩である。つまり、その作品はのちに文語詩「けむりは時に丘丘の」に改作されたが、文語詩制作のための覚書「文語詩篇」ノート中の「27 1922」という項目には、「十二月 仙台二行車中 やどり木／Miss Gifford みかん」という記載がある(十三卷(下)一九四頁)。

その詩篇で語り手は、「あかるいひるま／ガラスのなかに」まどろみつつ、「あの十二月南へ行った汽車」での会話を想起する(五卷一二九頁)。それは一部は英語で記され、相手は西洋人女性とわかるが、「天」に関する対話の断片も示され、それは妹の死後の行方について必死の模索に至った当時の賢治にとって、確かに重大な関心事だっただろう。その部分を引けば(校異記号は省略)、

Look there, a ball of mistletoe! と／おれは窓越し丘の巨
きな栗の木を指した／Oh, what a beautiful specimen of
that／あの青い眼のむすめが云った／汽車はつっけてまっ
赤に枯れたこならの丘や／濃い黒緑の松の間を／どこま
でもその孔雀石いろのそらを映して／どんどんどんどん
走って行った／“We say also heavens,／but of various

stage.” / “Then what are they?” むすめは（以下不明）
／（一、二行不明）（二二九—三〇頁）

これらの不明部分は、用紙が切り取られているためだが、この対話自体は、だれが何を話しているか理解は難かしくない。賢治は宿り木を指し、相手の女性は「なんと美しい標本でしょう」と言い、列車の外の情景の描写のあと、省かれている発話で女性キリスト教的な天を語ったらしく、それに對し賢治は「私たちも天を言うが、いくつもの段階がある」と仏教的な天を説明し始める（stageはstagesと複数になこと変だが）。

だが、不明箇所後の残された部分で語り手は、唐突に宗教と科学との関係と、みずからが「鬼」に転生する惧れとを語る。

聖者たちから直観され（以下不明）／古い十界の図式まで
／科学がいまだに行きつかず／はつきり否定もできないう
ちに／たうたうおれも死ぬのかな／いま死ねば／いやしい
鬼にうまれるだけだ（二三〇頁）

すでに述べたが、賢治にとって智顛と日蓮の「十界互具」や「一念三千」はその宗教的世界観の根幹だった。その賢治は、「異空間の実在」や「菩薩佛並に諸他八界依正の実在／内省及実行による証明」を言う「思索メモ」（十三卷（下）二六二頁）が示唆するように、その世界観と近代科学との融合・統合への期

待をもっていたが、この詩での述懐は、その模索の挫折の予感
を表出する。語り手はさらに己の来世への不安を述べるが、と
はいえ、それはたんなる失意だけを響かせるのか、その感受と
解釈は、改作された文語詩との関係を含めて丁寧な検討を必要
とする。だが、それを論じるのは別稿に譲りたい。

*本稿は、二〇一九年度のみなと区民大学「日本近現代の作家
と西洋」の第二回「宮沢賢治の作品のなかのキリスト教」（一
〇月三日）に基づく。